
君を探して

舞湖 早紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を探して

【Nコード】

N5559X

【作者名】

舞湖 早紀

【あらすじ】

ついに黒の組織を壊滅させ、灰原が作った解毒薬によって元の姿に戻った新一。ぎりぎり留年をまぬがれた新一は、普通の学校生活を送る。―はずだった。なのに、彼はある日事件の帰りに交通事故にあってしまふ。

病院で目を覚ました彼は、記憶を失い、下半身も動かなくなってしまふ。それは、命の代償としては重すぎるものだった。

一生車いすの生活を送ることになってしまった彼は、母の有希子と父の優作によって誰にも内緒でロスに連れて行かれる。

- 2年後。未だに新一を探していた蘭は、大学の留学先であるロスで車いすに乗った新一を見つめる。すぐ隣にある大学に彼が通っていることを知り、彼の家を探し当てる。そこにいた有希子に、蘭は衝撃の事実を伝えられる――

1 いじまの日常

ついに、新一はFBIの助けもあり黒の組織を壊滅させた。

その後APT^{アポトキシン}X4869のデータも見つかり、灰原に作ってもらった解毒剤により元の体に戻る。

そうしてぎりぎり留年を防ぎ、無事高校3年生に進学した新一であったが、先生から授業中に事件に行かないという条件があったため今は普通に学校生活を過ごしている。

そんな夏のある日である。

#~~~~#

「相変わらず暑っちなー夏は。」「
だらだら汗をかいている新一が言った。

今日は真夏の猛暑日。

気温は35度を超えており、道にはほとんど人がいない。きつと皆家でクーラーの効いた部屋で涼んでいるのだろう。太陽に向かって咲くひまわりがまぶしく見えるほどだ。

「そうだね。早く家に帰りたい！」
隣にいるのは蘭。

ちょうど二人で学校から帰っているところだった。

「じゃあ、また後でな！」

「うん。また後で！」

そう言って二人は別れる。

実は、蘭がこの前新一に告白の返事をして、めでたく二人はカップルとなった。

といっても、そんなにカップルっぽくないのだが……

別れてから足早に家に向かった新一は、いきなりびっくりすることとなる。

彼が「ただいま。」と言ってドアを開ける。
すると……

「お帰り、新ちゃん！」

いきなり母の有希子が抱きついてきた。

「げっ！……てゆうかなんているんだよ!？」

「何、げっ!って。私の家であるこの家にいちやだめなの?」

有希子は鋭く新一をにらむ。

「べ、別にそういうわけじゃ……」

「冗談よ冗談！そういうえば、新ちゃん蘭ちゃんと両思いになったそうじゃないの。よかったわね！」

「……まあ。」

にっこり有希子がほほえむ。

「何よ！今日はやけに素直じゃない。だって……」

その時――

ブルルルル

新一の携帯が鳴った。

「あ、ちよつと悪い……もしもし。」

『おー工藤君。もう学校は終わったかね？』

目暮警部からだった。

「一応警察も事情を知っているので、少し電話をかけるのをためらったようだ。」

「はい。もしかして、事件ですか？」

『その通りなんだ。今から来てくれるか？』

「わかりました。場所はどこですか？」

『杯戸町1丁目の1の35だ。』

「では、今から向かいます。」

そう言って電話を切った。

「新ちゃん、事件なの？」

怪訝そうに有希子が聞く。

「ああ。今から行ってくる……ってヤベー！今日は蘭とでか

ける約束してたんだった。ことわらねえと……」

そして、もう一度携帯を開き、電話をかける。

一方、蘭の家では――

「あれ、電話だ。」

まだ制服を着替えてなかった蘭は、そのまま携帯をとる。

【着信・工藤新一】

「もしもし、どうしたの？」

「実は、事件が入って……」

「また事件？この前もそうだったじゃない。」
不機嫌になる蘭。

「悪い、けどどうしても……」

「わかったわよ。だけど、気をつけて行ってきてね？平成のホームズさん。」

「悪い。じゃ」

彼は電話を切った。

「ふう……」

蘭はため息をつく。
いつもこうだ。

今度こそはと思うと、必ずその日に事件に新一が呼ばれる。
でも、今日だけは嫌な予感がした。

そう。1年くらい前に1度彼がいなくなったときのようだ。
結局、彼は何があつたのか話してくれなかった。
いつもはぐらかされて。

―その予感、ついに的中してしまつたのである。

そして、工藤新一は日本から姿を消す。

1 いつもの日常（後書き）

こんにちは！

舞湖早紀です。

とりあえず、この作品が2作目となります。

たぶんこの話はだらだらと続くと思うので、最後までおつきあいをお願いします。

2) 突然やってきた不幸 (前書き)

すみません！

またまた更新が遅くなりました・・・

あと、一つお詫びしなければいけないことがあります。

実は諸事情あって、2週間ほど更新することができません！

なので、次回の更新は再来週になってしまおうと思います・・・

本当にすみませんm(_____)m

「突然やってきた不幸

ここは杯戸町の事件現場。

「いや、今回も君の力を借りてしまったな！」

そう言いながら、目暮警部は新一の背中をばしばしたたく。

「いえいえ、難事件ならこの工藤新一にお任せを！」

痛そうに背中をさすりながらも、新一は笑顔で答える。

「とりあえず事件は解決したし、もう9時だから君は帰るかね？」

「え！？あ、ほんとだ……。ではお言葉に甘えて、今日はこれで失礼します。」

今回も事件に没頭していたため、時間が過ぎていることに新一は気

づかなかったようだ。

窓の外を見てみると、真っ黒な空に星がきれいに光っていた。

そのまま帰ろうとした新一を、慌てて目暮警部は引き留める。

「あ、なんだったら車で送るが……」

「いえ、結構です。結構今回も近いので……では、これで失礼します。」

・ 笑顔で颯爽と出て行った彼を、警察の方々は呆然とみていた……

一方新一は。

（また事件で遅くなっちゃったな……早く蘭に会いたい……）

）
そう。さつき警部の厚意を遠慮したのも、急いで出てきたのもこのためだった。

（ちよっと急がねえと。）

真っ暗で街灯も少ない夜道を、彼は一人で急ぐ。

でも、このとき急がなければよかった。

あそこで渡るうとしなければよかった。

この後する後悔は計り知れない量となる。

・
・
・
いろいろな偶然が重なって起こってしまった事実が、新一を苦しめる・

「危なあああああい！……！！！」
誰かが叫んだ。

それにつられるように新一は横を向く――――

その時にはもう遅かった……

キキイイイイイ!

ドンッ

あたりに鈍い音が響き渡る。

それと同時に、新一の体が数メートル先まで吹っ飛ばされる。

吹っ飛ばされた新一は――

まだかろうじて意識はあった。
しかし、もう何も彼の耳には届いていない……

血まみれの自分を見て彼は状況をすぐに理解した。
（俺……死ぬのか……？……ごめんな、……

．．．ら．．．ん．．．．．）

そこで彼の意識は途切れてしまっー

そんな中で、遠くでサイレンの音が鳴っていた．．．．．

#

その頃工藤家では。

「久しぶりねーこの家に戻ってくるのも。」

我が家の書斎を見ながら、有希子はほっとする。

「そうだな。」

本を読みながら、優作もくつろいでいた。

でも、そんなひとときもつかの間だった。

「久しぶりに家族全員でどこかに行きましょうね!」

「いいが、新一はどうするんだ?事件とか学校とかあるだろうし。」

「それは……」

その時。

有希子の話を遮るように電話が鳴った。

RRRRRRRRRR

「あ、電話だわ」

何気なく有希子は受話器を取る。

「もしもし、工藤です。」

『あ、工藤新一君のお宅ですか？』

相手の声は緊迫していた。

嫌な予感がする。

そう思いながら、普通を装って返事をする。

「はい、私は新一の母ですけど、どうかされました？」

『実は彼、交通事故にあっただんです！とてもひどい大けがで……』

「……え？」

有希子の顔色が一気に青ざめてゆく。

『今、緊急手術中なんです！早く、杯戸中央病院に来て下さい！！』
そこで電話は切れた。

受話器を持ったまま固まってしまった有希子に、優作が声をかける。

「どうした？」

「あ、あのね、し、新ちゃんが交通事故にあったって……今、

杯戸中央病院で緊急手術中……う、うわああああ

そこまで話したところで、有希子は号泣しだした。

そんな彼女を、優作は受け止めている。

でも、少なからず彼も動揺していた。

「とりあえず、病院に早く行こう。話はそれから……」

そして優作は、泣き続ける妻を乗せて病院へと車を急がせた……

#

杯戸中央病院では。

車を駐車場に止め、二人はいわれた手術室へと案内してもらった。

やっとついたが、まだだった。

《手術中》

このランプは、まだ赤々としている。

その近くにあったソファで有希子は眠ってしまったが、彼はずつと起きていた。

息子が無事助かることを祈ってー

- 5 時間後。

ようやくランプが消え、酸素マスクをつけた新一が運ばれてくる。

有希子もその音に気づいたのか、目を覚ましていた。

「新一は、新一はどうなるんですか?!」

つかみかかるように聞く彼女を、優作はなだめている。

「無事助かりました。数時間たてば、意識も取り戻すでしょう。しかし……」

「しかし……?」

「……彼には障害が残る可能性が高いんです……」

「な……ん……の?」

シーンと静まりかえった病院では、やけに大きくその言葉が聞こえた。

「頸椎損傷による下半身不随です・・・」

新
一
の
体
に
残
さ
れ
た
、
命
が
助
か
る
た
め
の
代
償
は
、
あ
ま
り
に
も
大
き
す
ぎ
た
・
・
・
・
・
・

2 突然やってきた不幸（後書き）

なんか今回はやけに長いです・・・

あ、ちなみに下半身麻痺といっても、別に胸から下全部が動か・・・

あわわわわ（汗）

次回のネタバレするところでした・・・

あと、もう一つの小説も、しばらく更新できません！！

この場でお詫び申し上げます・・・

引き続き感想やアドバイスなどお待ちしております！

これからもよろしくお願ひします！

3 記憶喪失

「下半身不随って……」

呆然と立ち尽くしている有希子の代わりに、優作が聞く。

「詳しくは、診療室でお話ししますんで、こちらに来て下さい……」

「

申し訳なさそうな医師に連れられて、二人は診療室へと向かった……

「頸椎損傷による下半身不随とは、脳のここの部分を損傷することによって起こります。それによって、通常は下半身、すなわち胸から下全体が動かなくなります。．．．が、」

「彼の場合は運がよかったのか、動かなくなるのが太ももとそこから下だけなのです。」

驚いた有希子は、少し希望を持って医師に聞いてみる。

「つまり、車いすさえあれば、普通の生活はできるって事ですか？」

「そうなりますね。ですが、危険も多いので、最初のうちは息子さんについてあげて下さい。」

そう言われて、二人は固まる。

「わ、わかりました．．．」

ただたどしい返事をしながら、二人は新一の病室へと向かった．．．

～

新一の病室に行った二人は、ただただため息をついていた。

「やっぱり、新ちゃんをロスに連れて行くしかないのかな．．．」
「だろうな．．．」

有希子も優作も、今まで新一をほったらかしにしていたことを後悔

していた。

何を思ったのか、有希子が新一のすぐそばにイスを持って行き、新一の顔を見つめていた。

気がつけば、カーテンの隙間から光が差し、病室は明るく照らされていた。

「こんな平気な顔してるのに、起きたらこのつらい真実を受け止められるかしらね……」

そう言っつて、彼女は新一の顔をなでる。

「うっ……」

知らず知らずのうちに涙があふれ、新一のほおをぬらしてゆく。

その時だったー

「ん・・・」

新一がわずかに瞬きをし、目を開けていく。

「新一！！」

二人は駆け寄り、うれしそうな顔をする。

一瞬雰囲気は和んだが、それもこの言葉を聞くまでだった。

「ココはココ？あなたたちダレ？」

「え………」

そう。

新一は事故によって、足の自由とともに記憶も失っていた……

•
•
•

~
~
#

蘭
s
i
d
e

ピンポーン

チャイムの音が響く。

ピンポンピンポンピンポンピンポーン

「ちよつと新一！？早くしないと遅れるわよ！」

事故のことを全く知らない私は、いつも通り新一の家に迎えに行っていた。

（もぉー、昨日の約束また断るわ家から出てこないわどつゆつつもりよ！もう新一なんか知らない！）

怒りながら、私はいつも通り学校に向かう。

途中で、大親友の園子ともあった。

「どつしたのよ、旦那と一緒にじゃないなんて。」

「何回チャイムを鳴らしても出てこないのー！」
「ぶっきらぼうに答える。」

「もしかしたら、事件で呼び出されたんじゃない？」

「・・・そつか。かもね。」

急におとなしくなった私に、園子が声をかける。

「もしかして、昨日なんかあった？」

「うづん、何でもない。」

見上げた空には、少し雲がかかっていた。

私の心の中にある不安を表すように、どんどん空を覆っていく。

また、会えなくなる気がした。

それも、前よりずっと長く。

まさかその時は、その不安が当たってしまつとは思わなかった・・・

3) 記憶喪失(後書き)

更新が遅くなりすみません・・・

本当に文章力無いですよね、私(T-T)

また、たくさんの感想ありがとうございました！

これからもよろしくお願いします！

4 決断

「やはり、記憶喪失ですね……」

重々しげに医師が伝える中、有希子が聞く。

「記憶が戻る可能性はあるんですか？」

「何ともいえません……。ただし、彼の場合はひどくダメージを受けているので。ほんとは、生きているのさえ奇跡なんですよ……」

その言葉を聞いた二人は、もう決心するしかなかった。

「先生、私たち新一が退院したら、ロスに連れて行きます。」

「え？あの体で……」

「今まで、日本に住む新一が中学生になってから仕事のため二人でずっとロスに住んでいたんです。会うのは年に三回くらいで……」

医師も目を見開く。

「だから障害があり、そして記憶喪失にさせてしまった以上、もう

心配で一人になんかできません！」
「・・・そういう事情があったんですね。では、あと一週間で彼を退院させましょう。」
「ありがとうございます。それでは、心配なので新一のところに行ってきます・・・」
・
きっぱり言った有希子は、優作を連れて新一の病室へと向かった・

~

新一 side

ここは？

僕は誰。

あの二人の人は誰。

どうして僕はここにいるの。

何もかも思い出せない。

それが、こんなにも苦しいことだとは思わなかった。

考えても、考えても頭が痛くなるだけ。

窓からはまぶしい光が差し込んでいた。
近くに行きたくて体を動かしてみても、痛すぎて何もできない。

ガラッ

そこで、さっきの二人が入ってきた。
とても深刻そうな顔で、こっちにやってくる。

女の人がしゃべり出す。

「あなたの名前は工藤新一。ごく普通の高校3年生よ。」

僕の名前は工藤新一……

「そして、私たちはあなたの両親。私は工藤有希子。こちらは工藤優作よ。」

僕の両親だったんだ。

「あなたは私たちが仕事でロスに行っている間、一人で日本で暮らしていたわ。」

つまり、ずっと一人暮らしだったってことか。

「でも、運悪くあなたは私たちが日本に來ているときに交通事故にあって、ここにいます。」

そういうことだったのか。

でも何か引つかかる。

何だろう。

「あの、いったい僕の体はどうなっているんですか？体中痛くて……」

とりあえず質問してみる。

「……っ新ちゃんの足はね、もう一生動かないの。」

「え……？」

「先生はリハビリ次第だっ行ってたけど、多分これからずっと車いす生活……」

嘘だ。

嘘だあああああ！

いきなり目が覚めて。

何も覚えて無くて。

気がついたら車いす生活？

そんな・・・

そんなの嫌だ！

真つ青になっている僕を見たのか、有希子さんは僕に声をかける。

「だから、一緒にロスで暮らしましょう？ちなみに、敬語じゃなくていいから。」

「うん・・・母さ・・・ん」

「それでいいのよ！じゃあ、一週間後に退院できるから、楽しみにしててね。」

そう言っつて、母さんは病室を出て行った。

僕自身は全然楽しみじゃないのに。

ふと思いつき、足を動かそうとしてみる。

―だめだった。もう、自分の意思でな動かせないと身にしみて思った。

そんなことを考えているうちに、いつの間にか意識を失っていた。

そして、深い深い眠りへと落ちていく……

4 決断（後書き）

本当に文章力無いですよね（T・T）

ところで、最近アクセス数を調べてみました。
すると、な、なんと・・・

3000アクセスを超えていました！

これも皆様のおかげです！

というわけで、これからもよろしくお願いします？

5 記憶の欠片（前書き）

今回は全部新一視点です！

5 記憶の欠片

気がつけば、辺り一面は真っ白。

自分以外には、一人の女性の天使以外いない。

その天使は、純白の翼を持ち、白い服に身を包み、絶世の美女といつていいほどの美人だった。

静かにその天使が僕に話しかける。

「あなたは工藤新一君ですね？」

「は、はい……」

その天使がほほえむ。

「私はここで困った人々をお助けする天使。あなたの望みは何？」

「えー……と……」

困っているのを見たのか、天使が僕の考えていることを見透かす。

「もしかして、あなた記憶が無いの？ だったら、前のあなたの記憶を少しだけ見せてあげる。」

「本当に?!」

「ええ。それじゃ、行くわよ。それっ！」

軽やかな天使のかけ声を聞いたとたん、たくさんの映像が映し出される。

まず、一つ目。

どこかの学校に、僕によく似た人と一人の女の子が入っていく。

その子は、髪の毛は真っ黒なストレートで、スタイルもよく、かわいい女の子だった。

『ねえ新一〜早くしないと遅刻しちゃうよ!』

『わーってるって! そんなに急ぐなよ蘭。』

『今日も熱々だね〜お二人さん。』
『っ、園子!』

新一?

蘭?

園子?

何が何だかわからない。

でも、少しだけ懐かしい感じがする。

それは、気のせいかな?

そして映像は二つ目が変わっていく。

次に二つ目。

また、僕に似た人とさっきの女の子が映っている。

でも、今回は私服だった。

後ろにビッグベンが見えるから……もしかしてここはロンドン?

僕に似た人が彼女を無理矢理引き留めている。

『嫌あ！離して！！ヤア〜！！』

『厄介なんだよオメーは！！』

『はあ？』

『オメーは厄介な難事件なんだよ！余計な感情が入りまくって、たとえ俺がホームズでも解くのは無理だろうぜ！』

何、何だこのシーン！

恥ずかしいような感じがして……

『好きな女の心を……正確に読み取るなんてことはな！！』

こ、告白？！

『え？』

『ラブは0ゼロだと？笑わせ……』

そこでいきなり映像が途切れる。

「あら……もう時間みたい。残りは自分で頑張っつね。」

天使が手を振ると、僕はどんどん何かに吸い込まれていく。

まるで、泥に吸い込まれていくように……

「ん……」
気がつけば、元の病室にいた。

あれは、夢だったのか……

少しほっとした気もする。

でも、少し懐かしかった。

何だこの気持ち悪さ。

何かが自分の中で渦巻いている気がして……

「あ、新ちゃん起きたのね！びっくりしたわよ。6日間も眠りつつ
けていたから……」

え？

あれだけで6日間もたっていたのか。

「ってことは明日退院?!」

「そゆこと。」

つまり、この病院から出るといふこと。

少し、怖かった。

本来の自分を取り戻すことが。

天使が見せてくれた前の僕の記憶は、あまりにも信じられなかったから。

今の自分と違いすぎて。

どうせなら、記憶を失った新しい工藤新一として生きたい。

そして、第2の人生を歩んでいきたい。

何で自分がそんなことを望むのかもわからない。

でも、もう元の工藤新一には戻りたくない。

だから。

「ねえ母さん、僕が事故で入院していること、ほかに誰か知ってる？」

「え？・・・もしかして、記憶を取り戻したの!？」

「違うけど・・・」

母さんはがっくりとうなだれる。

「私たち以外は知らないわ。でも、それがどうしたの?」

「ほかに誰にも知られないでロスに行きたいから。」

「なんで?」

「なんとなく・・・」

言うわけにはいかなかった。

実の両親に記憶を取り戻したくないなんて・・・

「・・・わかったわ。だったら、もう寝といた方がいいわよ?明日

朝早いから。」

「わかった・・・」

寝よつとする僕のそばで、母さんは必死に荷物をまとめている。

そして、早く明日にならないかと願う。

早くこんなところから離れたいから・・・

夕日が沈んでいく中、彼の気持ちも沈んでいった・・・

5 記憶の欠片（後書き）

なんか新一のキャラが崩壊してます・・・

記憶をとり戻したくないなんて・・・

それはさておき、最近冷えてきましたねー

やっぱり制服のスカートだと、めっちゃさむいです！
皆様も、体調には十分ご注意ください。

それでは、これからもよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5559x/>

君を探して

2011年11月20日19時49分発行